

## 白川静著 『漢字の体系』

笹原宏之

## 一 はじめに

新刊の白川静著『漢字の体系』（平凡社 二〇二〇年九月）は、「漢字の繋がりが見える全く新しい字書。約2500字を「天象・氏族・祭祀」等のテーマ、「安・才・多」等の形態素別に分類し解説」（版元による）した一冊である。「第一部では「天象・氏族・祭祀」など65のテーマ別に約700字、第二部では「安」から「婁」まで形態素ごとに約1800字をグループングし解説」ともいう（ここでいう形態素は、言語学の用語とは異なる意味で用いられている）。

世に広く知られた白川文字学をみずからまとめた最後の締めくくりとなる本書は遺稿とも位置付けうるものである。生涯にわたって既存の権威に挑み、苦境にあっても信念を曲げることなく研究を続けて功績を残し、最晩年において一〇〇〇頁を超える著述をなした著者にまづ敬意を表したい。

稿者は、先秦時代の社会や字源について、かつて加藤常賢、藤堂明保、白川静ほかの種々の書籍で研究に触れて、その学者像に憧憬を抱

き、学を志したことがあった。しかし、それぞれ一見確かに見える傍証を伴いながら各氏が全く異なる結論に至る「白」などの例、甲骨文や金文の不確かな形態や当時の不明確な発音に対する解釈に明確な根拠が示されることなく断定する姿勢などを見ていくにつれ、また近代の言語学は個々の語の根源的な語源や正誤、美醜を扱うものではないこと（そもそも文字も中心的には扱わないこと）などを学ぶ中で、実証できることが多い、より新しい時代の漢字の使用実態や変遷の原因の追究へと関心が移った。

そういうことにより、学部生の頃から中国古代の文字は専門とするところではないが、著者からの書籍など活字を通じての学恩に報いるために、この依頼を引き受けた。また、著者は、「知識は、すべてを疑うことから始まる」と述べていた（『毎日新聞』二〇〇五年二月一六日付「人生流儀」ほか）。著者の学者としてのこの信条は首肯すべきものであり、真実を追究する者は当然従わなくてはならない前提となる姿勢である。著者の遺志を受けとめ、以下は漢字学の一端を研究する者としての問題意識に基づく記述となることを、ご理解頂きた

い。

## 二 字源探究に付きまとう困難

字源の探究は、方法論的な困難を抱えている。まず古代中国での造字行為については、当事者による、あるいは同時代の客観的な記述が残されていない。従ってそこで書かれた文字が重要な資料となる。殷周代の甲骨文や金文は、文意はかなりの程度まで解読されているとされる。

しかし、個々の字については形音義や用法の各面で、種々の問題が残されている。三〇〇〇年以上前に書かれた漢字の多くが記された素材とともに失われているという事実は重い。甲骨も鐘鼎も、厳しい自然環境と度重なる戦乱などの中で偶然に後代に残されたわずかな遺物といえる。そして出土した甲骨文は比較的整然としていることなどから、より古い原初の漢字があったと考えられており、変形を経た字形しか見られない字もあることになる。

造字された段階での字義（本義や原義）や文法的な機能（用法）についても確実な資料は失われたままである。ある事物や概念にある字形が与えられた意図については、故人の心内に起因したものであり、その記述が見つからない以上、「本来」を語る場合、仮説とならざるをえないものがあるのは当然である。

そして当時話されていたであろう言語を押さえる必要がある。殷人の言語は、タイ語系とみる説があった（藤堂一九八三・同一九九三ほか）。ただしタイ語もシナ・チベット語族に属するとしただけのもので、

シナ・タイ語派の一つと見ていた。一方、金文を検討し、方言の差程度で同類とみる説が提唱された（佐藤二〇一九a）。言語そのものの具体的な音韻体系や語形、文法などが判然としない中で解読と語の特定を行うことには困難が生じる。わずかに形声文字（「寮」「字」「語」など）や仮借用法が当時の発音の影を残すばかりである。

古代の言語音や漢字音は、比較言語学、音韻学などの方法も基にして再構されるものだが、復元される発音は、古代に遡るほど複雑なものとなる傾向が見られ、実際の音価は自然でなければならぬものもあつたことを差し引いても、時代とともに複雑化する諸文化の現象とは矛盾を呈する。

文字を書いた人々とその文化、彼らが暮らした社会と信仰、儀礼などの実像に迫る必要がある。文字から確認するだけではなく、遺物や考古学的な資料、史料からも検討しなくてはならない。存在が確かめられない呪術を想定した字源説は仮説にとどまり、落合二〇二〇は「取」などの字でそれらを排除する。社会から文字を知ろうとする方法を採り、時に文字から社会を知ろうとすれば、循環の危うさが伴う。

本書ではフレイザーの『金枝篇』に収められた古代の各地の習俗が引かれることもあるが（「莖」など）、同じ人間、同じ時代なので、同じ文化圏、同じ社会だからといって同一の意識を共有するとは限らず、また他者である個人の心理を推断し正確に理解できるものか、そもそも現代においてもそうした推論がどこまで可能なのかは問われるべきであろう。古代人は素朴であつたというイメージも世になくはないが、俄には信を措きたい。

これら列記してきた諸点を実証的に統合しなければ、万人を納得させる字源説は生み出せない。それ以前に存在する語の語源についても、より根源的ではあるが本質的に同様であり、オーパワーツ的な資料が劇的に出土しない限り、断定的な判断は困難である。

実証のための根拠となるものに散逸や欠落がある場合、遺物同士につながりを設けるためには、論理的な合理性が求められる。無理のない論証である。不足する場合は、後代の連続する事物にそれらの痕跡を見出すことも求められる。物証、論証ともに万全ではない場合には、恣意性を排して資料を提示し可能な解釈と推測とを分けて記述し、不明な部分は未詳と明言することが後代のために必要な措置となろう。

稿者は古代文字学の世界にロマンと敬意を抱く者であるが、研究上の関心は上述の通り漢字の根源よりも変遷にあり、とくに和製漢字の展開がその中心にある。その成り立ちを考えるときには、ほとんどのばあい上記のエビデンスが十全には揃えられないために、後述するようにかんがりの想像を加える必要があり、古い字ほど断定を避けざるをえないケースが出てくる。数百年の前の日本の字に対してであってもそのような状況にある。まして、と考えると諦める者が多いことは無理もない。そこに果敢にも斬り込んだ先達の一人が著者であった。

### 三 百科篇の個々の検討

前半の「百科篇」では、著者の到達した体系的な枠組みが示されている。この意味分類と字種の選択による立項には、著者が明らかにしようとした古代中国社会の思想、民俗や生活、風習に対する見方と漢

字観が伺える。

「秋」（一六頁）は、甲骨文を秋の收穫時の害虫を焼く形とみる。甲骨文の字形、要素とその配置位置を理解し、文献を含めた字義の捕捉、当時の習俗に対する推理と中国における研究成果を活用した一つの到達点とみることができよう。「斤」（「おの」の形 五〇六頁）のように方法論を大きく異にする他者の研究成果と一致する説も少なからずある。

「卜」（二〇七頁）ではボクという音の由来に触れないように、本書では字形、字義に比して字音に対する言及が少ない。また日本漢字音の字音仮名遣いによる発音表記は、後継する者が検討し精緻化を要する点の一つである。二重声符を「ありえない」（一四四頁）とする点も同様である。

「民」（六二・九四七頁）は、目をつぶされた様子とみることは妥当だととして、「おそらく神の徒隸として仕える者」という推測は資料から証明が可能であろうか。転注篇においては断定をしている、こうした点に関しては批判が少なくない。大西二〇〇九はその一つの例であり、その解釈の差異を挙げると、「秦」（二五頁）を水中に陥った人を左右の手で救いあげる形とみるのに対し、大西二〇一三は、秦の全国統一を記念してその水徳に合わせて「秦」に似せて作り「大」に替えたとする。

「休」（二四一頁）の傍の部分は金文では「木」ではなく「禾」というが、本書に掲げられた字形は前の頁の「禾」のそれと重ならない。また、示されている甲骨の独特な字形については触れない点も気になる。

る。

「幸」は「コウ」「しあわせ」「さち」という音訓からは索引で見つけられない。実際に「信」のような類用の字も掲載されていないことがあるが、「幸」(七八三頁 タツ)という項目に見られる。「幸」の字では藤堂と同様に手かせ象形説を取っていたが、研究を更新し、修正しつづけていたことが読み取れよう。近年、変遷に問題のあることが指摘されている字であり(笠川二〇二〇ほか)、今後のさらなる展開と記述の整備が後続の研究者に求められる。

「竜(龍)」については立項していない。ただ「龔」の項目などで触れており、やはり全体を読む必要がある。この伝承古文の一つについて、笹原二〇一四〜二〇一九に追究したのだが、「」という周

代のものとして宋代から現れる、字形も拓本も文章も何もかもが怪しい系統の字であっても、古代の存在を否定しがたい点がいくつも確かめられた。「九」(四八五頁)においては、「九は竜の形。おそらく身を折り曲げている雌の竜であろう。岐頭の竜を虯竜といい、甲骨文の竜の字は九の字形に近い。」とする。「内」「究」などもこれによるとする。「旬」(字音のシュンからは引けない)「云」「雲」も同様とするが、落合二〇二〇などは「龍」の字との形態上の違いを指摘し、腕や雲の形と見る。

本書は「口」も立項されていない。「載書」はI IIにわたって説かれていたものの、索引からも辿り着きにくい。「コウ・くち」の使用は稀で、「サイ・祝詞を入れる器」としての使用がほとんどであったとする著者の文字論の根幹は、発表当初から斬新さを持って受け止め

られた。ただ今日に至るまで、「サイ」の材質のためか実物が確実に存在したという決定的な証拠となる考古学的な文物がなおも見つかっておらず(その可能性を示す出土品については佐藤二〇一九b参照)、仮定の上に白川文字学の体系が構築されていることになり、なおも仮説の段階にとどまっているとの位置付けが指摘されることが少なくない。多くの漢字に見出した呪術性とともに、構成要素の「匕」に「サイ」による解釈が張り巡らされている。漢字には「口」を含む字がかなりの比率で含まれているため、そこへの不審と批判が諸氏から寄せられ、個々の字に下した判断、認定さえも一切無視しようとする人もおり、そこをいかに乗り越えられるかが、今後の古代文字研究者に課せられた課題であろう。

「甘」(三二二頁)は、クチではなく「錠の形」、嵌入の意、形とみる(大形二〇一八参照)。「器」(一〇〇頁)では『説文解字』が「器」は器の口に象る、犬はこれを守る所以なりとすることを退け、「口」をサイとし、犬牲を以て清めた器とみる。なお、時空と言語を超えて常用漢字の字体への批判も行う。「尼」ではアマへの転用に批判を与えており、「原義」を重視しようとする姿勢は一貫している。

「匕」がクチのほか容器も表すとの指摘自体は、著者の独創ではない。たとえば清末に徐灝が『説文解字注箋』において「局」「匱」などや「器(器)」に含まれる口はクチではなく器、器物であると述べている。

民国期以降では、于省吾(「匕」に関して)について佐藤二〇一九bに指摘があり、唐蘭も『古文字学導論』において「匕」が食器の形

も表すとしていた（落合淳忠氏の御教示による）。日本でも、林泰輔（一九二二年没）が、『支那上代史之研究』などにおいてすでに（貝や冊の）「その下にある曰は積（はこ・ひつの意）の形」と推測している（大形徹「新発見で覆る定説。古代文字の世界はおもしろい」二〇一七年 <https://kaigo.news-postseven.com/59893> 大形氏から御教示も頂いた）。内藤湖南もまた『東洋文化史研究』（一九一七「支那上古の社会状態」一九三六など 久米二〇二〇）で「祭」に見られた「曰」の形は「肉を供へること」と解していたことなども知られている。落合二〇一一なども、祝詞を入れる器、入れない器の意を認めている。

「サイ」に関する推論は体系的であるが、相互の字が互いに証明の要素として機能しているように感じられる点も残されており、築かれた白川文字学が根底から揺るがされかねない。「才」（九五、五九八頁）の上部にも「曰（サイ）」があるとす。「字形」を重視する著者だが、本書に挙げる甲骨文、金文の字形が他の「サイ」とする字形とかなり異なったものになっている点が気に掛かる。印刷の苦勞は「白川先生が伝えたかった本当の漢字の世界」『漢字之窓』二一一 二〇二〇）などに記されていて敬意を表する者であるが、より説明に適した字形があったのではなからうか。また今後はその器物名も示されると検証が容易となる。「耳」や「齒」（齒）も立項されていない。むしろ「齒」には「口」の篆書のような形を甲骨文に見出すことができる（大形二〇一八、黄二〇一九ほか）。

言語は文字よりも先に生まれたもので、字源を音韻から考える

立場もある。藤堂明保は国内におけるその先駆者であり、カールグレンの単語家族説を発展させた。その成果には見るべきところもある一方で、例えば『学研漢和大典』では「淫」について字形を誤って認識した上での曲解を述べている。また字訓しか持たない日本製漢字に対してまでグループ化を無理に行うケースもある。

さらに漢字の場合は、書き言葉が成立した後に、廃字となった漢字を見つけ出して新たな語の表記として復活させたり、漢字を念頭に置いて熟語などの造語を行ったりするという西洋の言語学では想定しえなかった言語行動もなされ、さらに訓読みのような現象も各地で発生し、そうしたことから文字が音声に先立つ事象も起きていた。

「阜」（八八頁）は神梯とみる。「道」（七八頁）については、金文の字形から、首を手に乗えて破い清めるために道を行くとする。なるべく多くの形に意味を見出そうとする著者の方法の表れであろう。このような呪術の存在は、文化人類学的には想像できても、この字にそれが反映しているかどうかについては、文献にも遺物にも直接の具体性を持った根拠は確かめられない。著者が判断するに至った根拠（字形や典拠など）と思考の過程と真意を確かめるには『字統』などのより詳しい解説に戻る必要がある。著者は、各種の著述において分からないものについては分からないと明言することがあるが、その場合と断言する場合との違いが読み取りにくいことがある。

著者の字源説は、すでに知られているように漢和辞典などにも部分的に影響を及ぼした。また、書籍やテレビ、インターネットなどのメ

ディアを通して、ときに本当は怖い漢字というイメージを帯びて、古代中国に対する一般に広まっている戦乱や策謀や神仙の織りなす漠然とした世界観に融合しながら広まっていた。教育の場では、それを聞いて泣く子がいたと話す人がいた。福井県出身の学生たちに聞く限り、白川式の漢字教育は彼らに種々の影響を与えていることがわかる。

そうした義務教育を通して、子の名付けにいくつかの字の選択が少なくなる傾向が地域性として現れることが予測される。日本人は、基本的に和語こそが身体性を伴った語彙であるため、漢字を訓読みし、その字形に意味を見出し、また字形を意味に結びつけて理解しようとする。一方、中国の人々は、中国語の発音をそこに託し、また見出そうとする資質を有していることが随所で感じられ、また観察されるところである。著者が甲骨文に形声符を認めることも「青」(二七六、七二三頁 百科篇では「おそらく」とする)のようにあるが、この「道」字には形声説を採らない。

造字者が仮に異族から刈り取った生首を意図したとしても、この字を受け継いだ人々が同じように認識をして使用したとは限らない。漢字を習う過程で、造字者自身が解説を記した字源まで教わっていたとすれば、それはある時期まで受け継がれていたのだろうが、周代にすでに「武」に対する「戈」を「止める」からなるとの俗解(民間字源)が行われていたように、あるいは六書説が記録に表れる時期が遅いこととかがえるように、後の『蒼頡篇』のような識字教科書によって漢字の書かれた文章の中で漢字をひたすら覚えていたのであろう。ある程度覚えれば、他の竹簡などからも字を覚え、また必要に応じてそ

の場で既存の字を応用して造字したのであろう。そういうことから字形は変化し、字種も増減を繰り返したと考えられる。少なくとも後の道教の信仰において「道」を考える際に、この生首のイメージはほとんど意識されていなかったはずである。「眞」(真)についても同じことが言える。

字源研究全般に対していえることだが、古代には、ダブルミーティング的な造字は皆無だったと言い切れるのだろうか。会意形声という方法の存在さえ否定する者がいる。しかし、例えば「箠」は周代の金文に見える字で(笹原二〇〇七、落合二〇二〇ほか)、それから二〇〇〇年ほどたった室町時代ころに日本でも現れる字である。日本では、簡潔にまとめれば過去と同時代の文献における使用実態など種々の状況証拠から、「竹葉」の会意的な合字化、その頃に使われていた「苧」(篠を元にした字か)の「少」を字音が一部重なる「世」に置き換えた異体字化という二つの動機があったと考えられる。そこにも「竹には節(よ)」「すなわち「世」がある」という意識も造字者の脳裏に連想的に浮かび造字をあと押しした可能性さえ排除できない。むしろ、例えば「日本」という命名や解釈の際に、複数の絡み合う典故によって深い教養と知識を示すことができたわけであり(大形二〇二〇)、過去の造字において、この典故を根拠や着想に置き換えても良いが、それに類することが全くなかったと断定できるものだろうか。

現代は文字使用者を取り巻く状況が大きく変わっているものの造字行為自体には参考となるところがある。その創作漢字を六〇〇〇種ほ

ど分析したことがあったが、そこにはそうした複数の成り立ちを創作者自身が一字において語るものもあった（稿者にも思い当たる経験が省内省される）。これらも本当に現代日本だけの完全に普遍性を持たない現象と言いつけるものだろうか。

造字者自身の字解には、江戸時代の安藤昌益のようにまとまったものがあるが、ほとんど実用を企図した造字ではなかった。より近い例では、人力車（中国の他の字義ではなく）を意味する「俚」については、造字者がみずから意図を語った記録が一八七二年一月一日「東京日日新聞」二二六号（現在は「毎日新聞」に残されている）。

古今文明の際凡そ事簡易にして明解なるを貴ぶ因て示後馬車を驛と書し人力車を俚と書し文書往復すべし文路の諸君それ之を記せよ 大簡堂主人誌

不可知論に陥るばかりでは先に進めないが、むろんそこにも作者の胸中に去来した真実の意図が正確に述べられているのかどうかは保留すべき点がなくもない。この十年前に中国で刊行されていた易鏡清・易本娘『字孳補』に収められていた同形字を踏まえたとは伝来の状況や内容面などの点から考えにくいが、この記述から「人力車」の略合字だったのか、人の隣に車を配置することに象形性を含意させた会意文字だったのか、「くるま」と読ませる意志もあったのか、後に俚夫として現れる「シャ」という音を許容していたのかは、完全には読み取りがたい。

「白」については、見出し「伯」（三二六頁）において説いている。『説文解字』が篆書やせいぜい古文、籀文を対象に、ときに易や五行説の

影響を受けた解釈を示すものであったことは確かだが（福田一九七九ほか。「爻」「王」など。「禿」には王育の民間字源のような説も引く）、著者もこの字に対して成り立ちを断定する。信念の裏返しであろうが、そのためには読者に疑う余地を残さないようなエビデンスの明示が不可欠となる。たとえば「終助詞」の項目では「であろう」「らしい」と推測を示す表現が複数見られる。読者はそれを検証し、総合的に理解しようとすれば著者の他の膨大な著作を参観しなければならぬ。つまり本書は著者の最終作にして、白川文字学の入り口となっている。随所で中国古代の習俗に関して、奈良時代の『古事記』や『万葉集』が引かれている点も、著者の過去の著述を読んでいなければ、日中という空間と文化の違い、時代の隔たりを超えてつながりを見出そうとする論を理解しがたいであろう。

声符と原義との関係にも体系性が重要だとするが、古代の漢字は完全な体系性を維持できるまでに一元的であったかどうかについて、検証は不要であろうか。たとえば甲骨の書記に当たったグループに二派があったことが知られており、古代において書風の差にとどまらず、字によっては個別的に作られたという可能性も排除しがたい。春秋戦国の世では、各国で字形に変異が派生する。六書という概念が整備されていかなかった時代においては個々人の造字行為の際の心内での意図に関して、体系的に理解することのみ注意を向ければ、全体のために個別の特異性を捨象し、帳尻を合わせようとする操作を生み出す恐れさえあるだろう。

#### 四 転注篇の個々の検討

後半は、「転注篇」と題す。部首によって字を分類した『説文解字』において許慎は六書説の中の転注を「建類一首同意相受」と曖昧な説明をしたために、現在でも解釈が分かれているものだが、著者は形声符を等しくする文字は字義にも共通性があると解釈したようである。「波」「滑」の話で有名ないわゆる右文説の検証ともなっている。

ただ単語家族説（藤堂一九六五ほか）とは異なり、あくまでも形態面で共通する要素をもつ一群に対する検討である。「丁」「包」「辰」などでは、掲げたかなりの字群に、傍の字義が働いていると認めている（「丁」などの成り立ちについては、新たに異説が唱えられている。例：nkay 「漢字の成り立ち」を語る際は、最も初期の字形を根拠にしなければならぬ——「丁・正・以・亡・家・安」の字源を例として <https://note.com/nkay> 二〇二〇ほか）。

そもそも既に述べてきたように造字原理の傾向や造字の体系性は、必ずしも整然としていない面がある。たとえば、殷代の造字は、仮に神話的呪術的世界の象徴的かつ具体的な代表である占卜の記録に携わる者だけが独占していたとしても、殷代において字源意識が薄れるにつれて字形は変化しており、二次的な解釈を生む。その頃に新たに作られる字には、生まれてきた二次的な解釈こそが影響を与えることがあった。

本書の根幹には、漢代に許慎が編み、字源研究の指標のように扱われてきた『説文解字』に対するアンチテーゼがあり、本書は凡例に述

べるとおり、『説文解字』と白川文字学との対比を示している。音の近似する字を声符として利用する形声の方法が古代においてもあったわけなので、二次的解釈によるずれた意味を含蓄することもあったのであろう。

「臣」「帝」「真」（眞）などは、百科篇にも立項されており、おのおので文言が若干異なるため、著者の見方が複眼的に確かめられる。『説文解字』を「字形の学においては、音韻のみに依存すべきでない」とも述べて批判する。

「鶏」（鷄・雞）も殷代の初期にはまだ象形文字であったが、のちに声符「奚」が加えられた（黄二〇一九ほか）。このように明確なもののほか、構成要素に対して、字義よりも声符機能を見出そうとする方向に近年の中国の研究者は進んでいるように見える。また、中国では新出の甲骨文、金石文、戦国時代の竹簡などの出土物が後を断たない。それらを元にした精緻な研究も、上古音に対する研究とともに目まぐるしく進展している。中国の社会状況の変化に加え、研究職に対する業績評価が数値化され、非常に厳しくなったことも関わっている。

「各」（四二二頁 一五四頁にも）「客」「落」「路」などの頭子音が「丌」とに分かれることに関しては、紙幅の制約や編纂の目的によるのであるが、それでも『字統』に述べたような持説による言及があるところがあった（例えば「Baxter-Sagart Old Chinese reconstruction, version 1.1」(20 September 2014) べは「\*kʰak」 <http://ocbaxtersagart.lsa.it.umd.umich.edu/BaxterSagartOcbMandarinMC2014-09-20.pdf>。「台」（三五三頁ほか）「𪛗」（九九六頁）なども

同様であり、周代までしか測れないものとはいえず、上古音研究の成果を採り入れることがほとんどない。「兒」(五四三頁)では児童のシ(字音索引から引けない)とゲイとは別の字と見る。

「巫祝」に列挙された「若」「天」「吳」「而」「望の一部分」(一九〇―一九四頁)のほか、別の箇所にある「失」(六二九頁)、「兕」(二一八頁)など、著者が巫とみた字形に、形態の差異が大きいのはなぜであろうか。字形を重視する著者だけに、前述の「才」と合わせて気になる。「諾」「需」などにその解が及ぶのだが、これらに巫の姿があるとすれば、「眉」「夢」など(二一六―二二〇頁)の特殊な飾りは別格としようが、説明される踊り方などの状態や髪型などの違いを差し引いても、その姿に一貫性、体系的は必ずしも見出しにくい。この「失」は「詛楚文」を引く。戦国時代においても、なお殷代と同様の呪術が行われていたのかどうか、またその形がそういう姿だとして、その形が表すという字義やイメージと結びつけながら文章を綴る人が当時のどの程度いたのかも気に掛かる点である。「無」「舞」(一七七・九九九頁)は「人」というが、これらも巫と理解してよいのだろうか。ただし、呪術に覆われた世界観が常に指摘される著者であるが、「寮」(一〇〇〇頁)においては、むしろ『説文解字』にあった祭天という信仰を甲骨文による初文などに基づいて消去している。

「我」(四〇九、四一〇頁)は「原義」を鋸とする。これは定説といえようが、一人称に仮借される前に鋸として使われたことがあったのかどうか、そしてそこですでに、語られているような呪術の世界があった

たのか、著者の見解を確かめたかった。ここでは、「我」「義」「儀」「議」と字音と字体の違いを超えて、展開の跡をうかがえるようになっていた。奈良時代の辞書と見られる「小学篇」にも「儀」に「のほ(こ)ぎり」を載せている。『万葉集』が編まれる時代にこうした古い字義の伝播が起こっていたらしいことは興味深い。

先秦時代に著された漢籍は、その竹簡を見ると仮借による表記が非常に多い。それが後代の敦煌写本や宋版では、字書が正しいとする字種や新たな形声文字になっているケースがしばしばある。そもそも伝世文献と出土資料とで本文や使用されている語や字が異なるケースは、広く知られるようになった『老子』のそれを持ち出すまでもなく、ごく一般的に見られる(大形二〇〇三ほか)。本書では、始皇帝がツミの意に変えたと伝えられる「罪」(一八三頁)なお、この史実については議論がある)が『論語』にあるとして否定しているが、著者が長く解説に努めた周代の金文と、『詩経』『書経』などの漢籍とをマッチングさせる際には、これらの異文とミッシングリンクはいかに解決されるのか、今後の課題の一つであろう。

## 五 おわりに

本書は、漢字と古代社会の究明に心血を注いだ著者が平易に最終到達点を示した一冊である。無批判の継承か峻烈な批評による全否定かの二者択一ではなく、個々の検証と漢字の字源に関する学問全体を発展させる建設的な批判が求められる。

本書で凡例に示された文字資料は、一九八〇年までのものであった。

中国では、古代の字源の影を伝える甲骨、鐘鼎、璽印、封泥、竹簡などの出土が相次いでおり、「本書の編集について」において語られた『説文解字』の「資料の不足」は、時の経過とともにそのまま本書にも返ってくる。字源研究は、前述の通り偶然の出土物とともに更新される運命にある。

稿者が編集委員を務める『日本語学』では二〇一一年一〇月号において特集「字源研究の現在」が生まれ、字源研究の広がりや展開が示された。李二〇一三、黄二〇一八、裘二〇一九などの専門的な書籍に加えて、今も『中国文字』『中国文字学報』『中国文字研究』『出土文献』『出土文献研究』『出土文献綜合研究集刊』『出土文献与古文字研究』など中国の各研究組織から続々と届く専門誌には、中国や欧米などの学者たちにより、最新の資料に基づく新たな字源解釈が学会の査読を経るなどして報告され続け、日進月歩の活況を呈しているが、台湾と異なり著者の成果の参照は少ない。

楷書成立後の漢字に関しては、稿者もそれらに僅かに関わりつつ圧倒的な学的刺激を受け続けている。白川文字学も佐藤二〇二〇の説くところ、中国側の研究による更新が求められる。過去の折口信夫の影響を受けた民俗学や文化人類学とは別の方法論の採り入れも提起されている。そうした方向性は、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所の研究雑誌にも表れている。また、新潟市民病院の医師、橋立英樹氏は、「心」の古体字は幼児の心臓の形に似ていると解剖の際に気付いたそうであり、そうした学際的な知見も多くの可能性を秘めた状態にある。殷代を視野に入れた字音研究もまた新たな段階に入っている。

本書の刊行により、二〇〇六年に世を去った著者による記述は、すべて公刊されたということになる。著者は、前述の通り「知識は、すべてを疑うことから始まる」と述べていることから、祖述するばかりで批評や解説抜きに社会還元を行うことが起こるとしたら本意ではなからう。先行研究への敬意を忘れることなく相対化を旨とすれば、この先は著者の遺した膨大な文字研究について漢字研究史上での位置付けを行いつつ、本書の冒頭に「新しい文字学の成立のために」（本書の編集について 平成一八年〓二〇〇六年）とあるとおり、健全な相互批判の中で字源と歴史、社会、文化、そして信仰と儀礼の実相の一層の解明に向けて、次の段階へと進んでいくことができるであろう。

#### 主要文献

- 阿辻 哲次『新装版 漢字学 — 「説文解字」の世界 —』東海大学出版会 二〇一三
- 大形 徹「僊」と「仙」— 神仙思想の形成と文字の変化』『人間文化学研究所集録』一二 二〇〇一
- 大形 徹「口耳の口」『漢字学研究』六 二〇一八
- 大形 徹「國號「日本」の「本」はどのような意味か」『漢字学研究』八 二〇二〇
- 大西 克也「文字の緑」 <http://www.1.u-tokyo.ac.jp/teacher/essay/2009/3.html> 二〇〇九
- 大西 克也「秦の文字統一について」『中国新出資料学の展開』汲古書院 二〇一三
- 落合 淳思『甲骨文字小字典』筑摩選書 二〇一一
- 落合 淳思『漢字の構造』中公新書 二〇二〇
- 笠川 直樹「釋上博竹書《昭王毀室》的“幸”字 古文字学研究文献提要」『陳劍の論考より』『漢字学研究』八 二〇二〇
- 加藤 常賢『漢字の起原』角川書店 一九七〇
- 加納 喜光『漢字語源語義辞典』東京堂出版 二〇一四

- 裘 錫圭『文字学概要』修訂本 商務印書館 二〇一八  
 久米 正雄『東洋文字文化研究 一白川静博士とわたしの印学(上)』『東洋文字文化研究所紀要』一三 一〇二〇  
 黄 德寛『古文字学』上海古籍出版社 二〇一九  
 笹原 宏之『日本の漢字』岩波書店 二〇〇六  
 笹原 宏之『国字の位相と展開』三省堂 二〇〇七  
 笹原 宏之『漢字の歴史』筑摩書房 二〇一四  
 笹原 宏之『奇妙な象形文字の出現と変容』『龍』の象形文字のその後「さら」に現れたあの「龍」『墨』二二九〜二三八、二四九・二五〇、二五五・二五六 二〇一四〜二〇一九  
 佐藤 信弥『殷の言語と周の言語は異なるか』『桐墨 大東文化大学書道研究所報』一〇・二 二〇一九 a  
 佐藤 信弥『「出」字の釈読と白川静の「出」字説』日本漢字学会第二回研究大会 二〇一〇 b 日本漢字学会  
 佐藤 信弥『白川文字学の今後の展望 一中国の研究との対比を中心に』『人文学論集』三八 二〇一〇  
 佐藤 進・濱口富士雄『全訳漢辞海』第四版 三省堂 二〇一六  
 白川 静『漢字 一 生い立ちとその背景』岩波新書 一九七〇  
 白川 静『漢字の世界 一 中国文化の原点』平凡社 東洋文庫 一九七六  
 白川 静『漢字百話』中公新書 一九七八  
 白川 静『字統』平凡社 一九八四(新訂 二〇〇七)  
 白川 静『字通』平凡社 一九九六  
 白川 静『字書を作る』平凡社 二〇〇二  
 白川 静『常用字解』平凡社 二〇〇三  
 田畑 暁生『白川静ブームとその問題点』『神戸大学大学院人間発達環境学 研究科研究紀要』六一 二〇一三  
 陳 紹慈『徐灝說文解字注箋研究』花木蘭文化出版社 二〇〇六  
 藤堂 明保『漢字語源辞典』學燈社 一九六五  
 藤堂 明保『漢字の起源』現代出版 一九八三  
 藤堂 明保『漢字と文化』徳間書店 一九九三  
 藤堂明保中国語学論集編集委員会編『藤堂明保中国語学論集』汲古書院 一九八七  
 馬 慧『說文解字注箋研究』寧夏人民出版社 二〇〇八  
 橋本萬太郎『言語類型地理論』弘文堂選書 一九七八  
 福田襄之介『中国字書史の研究』明治書院 一九七九  
 李 学勤『字源』天津古籍出版社 二〇一三

付記

This work was supported by the Ministry of Education of the Republic of Korea and the National Research Foundation of Korea (NRF-2018S1A6A3A02043693)

(早稲田大学社会科学総合学院教授)

